《凡　例》

一、五十年の校史を編むにあたり、戦前を草創期と発展期に、戦後を新生期と雄躍期に区分し、四章構成とした。
　各章のはじめに、その時代の特色を論じた二ページを設けてある。
一、各章の内容はつぎのとおりである。
　本　文 ＝ 通　史
　欄　外 ＝ コラム／エピソード
　太ワク ＝ 卒業生・旧職員寄稿文
　桜花片々 ＝ 座談会
　資　料 ＝ 学則など諸史料・校内諸記録
　面　影 ＝ アルバム・記録写真
一、編集を終えたのち火災が発生したので、その記録は《追録》として加えた。
一、原則として当用漢字・現代かなづかいを尊重した。ただし、時代の空気を生かすように努め、戦前の引用文については原文のままとした。なお、敬称はすべて省略するのを建前とした。
一、史料の下限は昭和五十一年末までとしたが、職員名簿は昭和五十二年四月現在で記録した。
一、膨大な資料を参考にしたので、そのすべてを盛り込むことはできなかった。すなわち、やむを得ず利用を断念した資料が相当数ある。

編集後記

〔その1〕

昭和五十年十一月八日、石桜同窓会総会において、来たるべき母校創立五十周年記念事業の一つとして〝五十年史〟刊行の件が提案・採択されて以来、五十一年十二月脱稿するまでわずかに一年余。この間、数次にわたって編集委員会が開かれ、基本方針の検討にはじまり、資料の収集・整理、校正、造本、価格の設定、頒布の方法の打合わせに至るまで、実に精力的・集約的に作業が行なわれ、今ここに刊行・配本を見るに至った。

かえりみて、〝年史〟として収録記載すべき事項として脱落・遺失のあることはまぬがれ得ぬ連載されたものである。五十年史の前駆をなしたものなので、記念の意味をこめて採録した。

歴代校長の事績に比して一般教員の記録が少ないとは一委員の指摘であったが、資料の偏在は執筆陣も痛感したことである。貴重な資料がまだまだ眠っていると思うので、来たるべき八十年史、百年史のためにもご提供をお願いしたい。また本書はもとより個人の顕彰が目的ではない。散見する人名は、流れの証人と了解されたい。

かえりみて、叙述の繁簡よろしきを得ないところもあり、資料未詳で後考に待たねばならぬものも数多い。表記の点も完璧は保し難い。これらもろもろの不備は次の年史の課題として申し送りた

ず、また資料散逸のため記載するの体に至らず、完璧を標榜しつつも成し得なかった憾のあることも否めない事実である。

しかしながら、母校創立以来今日までかつて試みられたことのなかった〝年史〟の刊行をみるに至ったことは、自他ともに慶びにたえないところである。しかも、これを基盤として今後その欠を補い、よりよき〝年史〟が刊行され、母校の足跡を記す契機となるであろうことを思えば、ただに五十年の経緯を回顧し、思いを新たにするのみにとどまらず、母校伝統の新生を期するよすがともなり、その意義はまことに大きいものと言わねばなるまい。

私たち編集人として微力であり、結果したところのものは不備ながらも、各位の支援と期待に励まされ、ともかくも刊行のよろこびを味わわしていただいたことに心からなる感謝の意を表するところである。

（松見）

〔その2〕

〝石桜〟の源流を求めて快い難業が続いた。本書刊行が具体的日程に上ったのは五十一年二月のことである。以来、前後四回にわたる編集委員会議、八回におよぶ編集小委員会が開かれて本書の内容が吟味され、刊行計画の細案も練られていった。

職員室を総動員した資料委員会の発足は三月、素年表の完成は七月、本文の執筆開始は八月である。当初、秋の五十周年記念式典に間に合わせるべく執筆は強行されたが、やはりこれは無理なことで、計画は修正を余儀なくされた。本文原稿がほぼまとまって大組みのでき上ったのは、年の瀬もつまった十二月三十日夜のことであった。

資料は多く校内の古記録によったが、時代によっては取材座談会、または探訪取材により欠落を補った。座談会「桜花片々」はかつて同窓会報にい。

本書を編むに当り、山中順三、小笠原哲治両先生から温かいご激励を、遠藤校長からは終始適切な助言をいただいた。編集は、松見委員長以下全委員の協力によって進められたが、ほかに藤村正一（新15）、川村康二（新24）両氏の応援も得た。両氏には原稿整理から雑用のはてまで苦労のかけどうしであった。また山口北州印刷編集部と、畏友山口徳治郎君の助力に大きく支えられた。中学時代ともに青春の夢を語り合った山口君と、いまた同じ委員となったは因縁というものか。同君の寄せられた多大の便宜と示唆に、本書は多くを負うている。

寄稿者、資料提供者その他多くの方々の惜しみないご協力に深い謝意を捧げて筆をおく。

（西在家）

石桜五十年史編集委員

委員長　松見　得明
委　員　戸嶋　正夫
目時隆太郎
阿子島　寛
足沢　至
山口徳治郎
池口　杜孝
大野　元
西在家　寛

＝追記＝

四月の学校火災は、本書の刊行にも重大な影響を及ぼした。文書庫にあった古記録諸資料は灰燼に帰したのである。本書稿本と資料コピーは印刷所にあって難を免れたことは幸いであった。刊行作業は一時中断されたが、早期刊行をとの激励もあり、ここに作業を再開して刊行にこぎつけることができた。刊行の遅れをお詫びしたい。